世界の履物ミュージアム

14. ポーランド⑤

鈴木　絵美留

<前号（216）号から続き>

グダニスク旧市街で行われた発掘調査や、革製品が良好な状態で残された保存環境、そして長い年月をかけて行われた修復・復元作業についてご紹介してきましたが、そうしてよみがえった歴史的な履物たちは、かわとはきもの215号でも言及した2016年4月29日から12月15日まで、グダニスク考古学博物館で開催された特別展「KAŻDY KROK ZOSTAWIA ŚLAD（EVERY STEP LEAVES A TRACE）」で一般公開されました。今号から展覧会について紹介していきます。



展覧会ポスター

展覧会タイトルの「EVERY STEP LEAVES A TRACE（すべての一歩は痕跡を残す）」というタイトルは、とても印象的ですね。革靴は歩くたびに皺が入り、靴底は摩耗し、時には補修されながら持ち主とともに歳月を重ねます。そして役目を終えた履物は土中へ埋もれますが、その「使われた痕跡」は数百年後、考古学者にとって当時の生活を読み解く重要な資料となります。“履物そのものが人々の歴史を語る”、この展覧会はその考え方をタイトルに込めていたように感じます。

今回あらためて展覧会カタログを読むと、この展示は単なる成果発表ではなく、グダニスク考古学博物館が30年以上にわたって続けてきた発掘調査と、15年以上に及ぶ保存修復事業の集大成として企画されたことが紹介されています。長年にわたり蓄積された研究成果を、一般の来館者にも理解できる形で公開することが、この展覧会の大きな目的だったことが分かります。

また、学術担当副部長のベアタ氏は、ポーランド通信社（PAP）の取材に対し、このコレクションはヨーロッパでも類を見ない規模であり、これほどまとまった形で公開されるのは初めてであると説明しています（筆者訳）。こうした言葉からも、この展示が博物館にとって特別な意味を持っていたことが伝わってきます。



展示室風景

博物館の公式案内によれば、展示では約131点の資料が公開され、そのうち約70点が復元された歴史的履物でした。さらに15世紀の靴職人工房の再現、保存修復工程の紹介、

教育映像やマルチメディア展示なども設けられ、単に履物を鑑賞するだけではなく、「履物を通して考古学を学ぶ」ことができる構成となっています。



靴専門工房の再現展示

展示室の写真を見ると、まず目を引くのは壁一面に設置された大型パネルです。その前に実物資料が配置され、来館者はパネルを読み、実物を観察し、再びパネルへ戻るという流れで展示を巡ることができます。革の質感や縫製痕、摩耗など細かな部分までじっくり観察できる展示空間となっています。

ここで興味深いのは、展示が年代順の説明から始まっていないことです。一般的な歴史展示では「12世紀」「13世紀」と年代を追っていく構成が多く見られますが、本展では最初に「歴史的な履物はどのように見ればよいのか」という視点を来館者へ提示しています。

展示室の入口で来館者を迎えるのは、「履物の構造」や「装飾技法」を紹介する大型パネルです。履物を年代で分類する前に、「一足の履物をどのような視点で観察すればよいのか」という基礎を伝える構成になっています。展示パネルの内容は展覧会カタログにも詳しく収録されており、博物館が「まず履物を見る目を育てること」を重視しているように感じます（とっても素敵なアプローチですね）。

展示パネルは、実物資料の「解説」ではなく、「履物を観察するための教科書」とも言える存在であり、その知識を踏まえて展示ケースを見ることで、革の種類、装飾技法、つま先の形、修理の痕跡など、それまで気付かなかった細部が自然と目に入ってきます。



展示風景

現地メディアでも、この展覧会は「珍しい靴を集めた展示」ではなく、「履物を通して中世の暮らしを読み解く展示」と紹介されています。履物は単なる服飾品ではなく、技術、流行、交易、社会階層、さらには人々の日常生活を映し出す資料であることを、実物とともに分かりやすく伝えようとする姿勢が随所に感じられます。

専門家だけが読む報告書ではなく、博物館という場で実物を前にしながら学ぶことのできる機会をつくること。それこそが『EVERY STEP LEAVES A TRACE（すべての一歩は痕跡を残す）』展の目的だったと思います。

一足の靴には、職人の技術、流行、都市の発展、そして持ち主の日常が刻まれています。この展覧会は、そうした履物の持つ情報を、考古学という視点から来館者へ丁寧に伝える展示です。<次号へ続く>

*展覧会チラシ及び展示風景写真はすべてグダニスク考古学博物館　学術担当副部長のベアタ氏より提供